

A先生におこたえします

(エリヤハウスの問題に関する私の文書「私たちの中にある間違い」に
応答してくださった、A先生の反論におこたえします)

2015年9月15日
西九州伝道所 佐々木正明

私が先月全国のアッセンブリー教団の教職にお送りした（8月11日付25日前後に発送）、エリヤハウスに関する文書「私たちの中にある間違い」に対し、α教会のA先生から、反論の文書をいただきました。（8月30日付）公平を期し、全国の教職のより良い理解を得、教団の正常なあり方にいくらかでも寄与するために、A先生には、A先生の文書を全国の教職にお送りするように、お勧めいたしました。現時点ではお送りくださったかどうかはわかりませんが、先生の文書におこたえし、できるだけ多くの教職にも読んでいただき、問題の核心をご理解くださるように願って、A先生の文書とともに、この新たな文書をお送りするものです。

私の願いは、エリヤハウスを取り入れている方たちを非難したり、傷つけたりすることではありません。むしろ同じ教団に属する者として、真に聖書に根差した信仰やミニストリーについて、お互いの理解を深めることによって、より良い働きにつながることを期待するものです。エリヤハウスは、非常に多くの聖書語句を用い、正当なキリスト教活動であるかのように装っています。たしかに有益な正しい教えもたくさん含まれていますが、基本的な教えに大きな間違いがあり、それから派生する多くの小さな誤りもあり、危険な限界にあると思えます。まず、その点に気づいていただきたいと、切に願うものです。

またこの文書は、性質上、言葉が厳しくなる可能性があります。どうかその点をあらかじめ理解し、お許しくださいますように、お願ひ申し上げます。

I. まず、結論的なことから

まず、結論的なことから申し上げたいと思います。

●エリヤハウスの目指すところ

私の理解するところでは、エリヤハウスが取り扱う主なものは、普通のクリスチヤン経験では取り扱われることが少ない、心の深層にある、悲しみ、苦しみ、怒り、憤り、恨み、復讐心、あるいは性的衝動に関するものようです。それらを何とかして解決しよう、そ

のような問題から解放してあげようと、エリヤハウスの方々は努力しているのだと思います。

その意味では、エリヤハウスの働きは認めて上げなければなりません。世の中には、心理学を利用したり、哲学を用いたり、宗教を使ったり、カウンセリングを取り入れたり、ロールプレイを駆使したりしながら、人間の心の深層の問題を取り扱おうとする働きが、他にもたくさんあります。エリヤハウスの創立者であるジョン・サンフォードの師匠と言われているアグネス・サンフォードも、そのような働きを提唱し実践していました。彼女の教えを受けた者たちの多くも、キリスト教とは直接関わりのない世界で同じようなことをを行い、様々な問題を起こしながらも一定の成果を上げてきました。

ジョン・サンフォードが他の人たちのように、一般世界に留まっていたならば、私たちになんの関わりも無く済んだことでしょう。しかし彼が、キリスト教界の中で、しかも福音主義の神学をもつ人々や、ペンテコステの流れを汲む人々の間でその教えを広め、キリスト教の働きとして、その教えと実践を浸透させていることが大きな問題なのです。

●私たちの問題として

エリヤハウスが聖書的かどうかを問う前に、そのような教えが、私たちの教団の多くの同労者的心を捉えているという事実には、真剣な目を向けなければなりません。もしも、私たちが宣べ伝えている福音を正しく理解し、私たちが拠りどころとする聖書の教えに固く立って、伝道と牧会活動をしていたならば、人間の心の深層に潜む問題を、エリヤハウスの教えによって解決しようと、考えなくとも済んだはずだからです。

私たちが述べ伝えている福音は、エリヤハウスが取り扱っている人間の心の問題に、もっと効果的に、解決をもたらすことができるはずなのです。キリストの贖いにはそれだけの力があります。聖霊は、エリヤハウスの手法を借りなくとも、心の深層の問題に痛んでいる人々を解放する、能力を持っておられます。私たちの中に救いを達成してくださった聖霊は、その救いを、今の私たちの実生活の中にも、力強く実現して下さる方なのです。

ところが、聖霊について強調して来た私たちアッセンブリーズ・オブ・ゴッドでも、伝統的に、聖霊の働きを宣教論的に捉えることに熱心で、聖霊のバプテスマについても、宣教のための力の付与という一面だけに関心を注いできました。その結果、異言についても、聖霊のバプテスマに伴う印にすぎず、あまり価値のないものと理解されて来たのです。「異言を求めるのではなく、聖霊のバプテスマを求めましょう」という勧めが、くり返されて来たものです。私たちの聖霊の神学は、ルカが取り扱った宣教に関わる聖霊論に傾き、宣教、伝道、教会の設立、教会の成長などに関わって、理解されることが多かったのです。

一方、パウロが語った教会論、信徒論的側面からの聖霊論については、私たちはあまり強い関心をもたずに入りました。聖霊による教会の形成、聖霊による神との交わり、聖霊による信徒同士の交わり、聖霊による一致、聖霊による信仰の成長と人格の変革、聖霊が行って下さる心の奥の問題の取り扱いなどに、充分な関心が払われず、「救われた」、「さあ献金しよう」、「さあ伝道しよう」、「さあ教会を建てよう」という流れになるのが、一般的だったように思います。

そこでは救われた人の「救われたという事実」だけに関心が払われ、救われた人の現実の問題の解決、特に心の深層の問題の解決には、触れられずじまいだったのです。救われたという霊的事実が、日常生活に現されてこないままになっていたのです。救われた多くの人は、永遠の命を与えられた、神の子となったなどという霊的事実を教えられ、知的理解によって喜び、感謝はするものの、現実の諸問題に悩み続けているのです。エリヤハウスはその現実の悩みの中でも、特に、心の深層に横たわる問題に手当をしようとしているのです。

本来、聖霊の働き全体を強調すべきだった私たちが、使徒の働きに偏って宣教論的に捉え、パウロの教える聖霊の働きに、少なからず疎かだったために、信徒たちの現実の必要性、特に心の奥深くに潜んでいた痛みや悲しみなどの問題に、答えられなかったのです。私たちの同僚者の中にも、救われたという霊的事実に理智的に感動し、伝道者とはなったものの、聖霊が心の深層の問題に触れて下さるという体験をしないまま、痛みを持ち続けてきたために、様々な困難に直面しておられる方が、いらっしゃるのではないかでしょうか。

それが、エリヤハウスの働きに触れることによって癒されたと感じ、解放されたと実感するのです。そしてその体験に伴う感動のために、健全な聖書の理解という大切なことを横に置いたまま、エリヤハウスに「はまって」しまったのではないかでしょうか。私たちは宣教の神学としての聖霊論だけではなく、教会の神学、信徒の神学、神との交わりの神学、信徒同士の交わりの神学、痛みからの解放の神学としての聖霊論を構築し、実践して行かなければならぬのです。それが遅れているために、エリヤハウスのような活動を許すことになってしまったのです。

●聖霊の執りなし

ローマ書 8 章 26 ~ 28 節においてパウロは、聖霊の執りなしという非常に重要な事柄について語っています。ここでその教えを充分に取り扱うことはできませんが、彼は、聖霊がクリスチャンたちの呻きを (v 23) ご自分の呻きとして呻きながら、どのように祈つたらよいのか分からぬクリスチャンのために、執りなしをしてくださると教えていました。それは、今キリストが天上で担つて下さる執りなしの働きとは、幾分性質の異な

る執りなしです。それは、私たちの祈りを父なる神に届けてくださる執りなしではなく、私たち自身が祈りの中で表現できない問題、痛み、苦しみ、悲しみを、表現できるように助けて下さる執りなしだからです。そして、この執りなしを受けて下さる神は、人の心の極みまでも探り理解してくださる方であり、私たちの呻きを共に呻いて下さる聖霊のみ心をも、完全に知っておられるのです。

聖書を神学的に理解するならば、すなわち全体の教えを総合的に理解し、それらを繋ぎ合わせ組み合わせながら理解すると、これは、パウロの教える異言の働きと、関連付けるのがふさわしいのではないかと思われます。つまり、聖霊がこの執りなしの働きを遂行するとき、異言の機能を活用される場合が多いということです。異言は、パウロの教えによると、神に向かって語る言葉です（Iコリント14：2）。神が人に向かって何かを伝える時に、お用いになる手段ではありません。

つまり祈り、感謝、賛美、訴えの言葉です。人間が、自分の言語能力や言語そのものが持つ限界のために、言い表すことができない心の奥深くの呻きを、充分に表現させてくれるのが異言であり、その異言による聖霊の執りなしによって、人間は自分の言語の限界を超えて、神と深く交わすことができると同時に、心の問題から解放されるのです。言葉で表現すること、告白すること自体が、心の浄化に有益かつ効果的であることは、誰でも知っています。ましてや私たちは、自分の言語能力を超えて、全てを理解してくださる神に告白し、訴えることができるのです。

パウロは、反ペンテコステの人たちの見解に反し、異言を語ることを非常に重要視していました。公の秩序を乱すことに関しては厳しく戒めていますが、パウロ自身、「誰よりも多くの異言を話すことを神に感謝している」だけでなく、その体験を自分だけの体験としてしまい込んでいません。「私はあなたがたがみな異言を話すことを望んでいます」と語り、「異言を話すことを禁じてはいけません」と指導しています。パウロは異言の役割をよく心得、その働きの重要性を理解していたのです。彼自身が異言の祈りによる神との深い交わりをしばしば体験し、宣教者や牧会者としての、また先覚的神学者としての、様々な軋轢や心配、ストレスや悲しみ、そして彼自身の弱さの自覚からくる痛みから、解放されていたのではないかと想像します。

●聖書が教える聖霊の体験として

私たちは老舗のペンテコステ教団に属し、聖霊の問題については、聖書的にも、神学的にも、体験的にも、誰よりも理解していると思っています。多分その通りでしょう。でも、聖霊の執りなしという、この大切な部分の理解は非常に薄かったと言えます。異言の機能という点でもまったく理解不足で、余りにも軽視したままなのです。ですから、信徒の心

の深層にある問題に対処できないまま、エリヤハウスのような働きの台頭を許しているのです。

エリヤハウスの手法は、この聖霊の執りなしの働きを、人為的に「疑似体験」させるものです。人を苦しみから解放させる働きそのものを、疑似体験だからと言って非難するものではありません。人為的だからといって否定するのでもありません。疑似体験でも人為的な手法でも、場合によっては必要なことがあります。赤ちゃんのおしゃぶりは、母親の乳首の疑似体験で、まったくの人為的手法です。でもその疑似体験によって、赤ちゃんはある程度満足できます。悪いのはその疑似体験を際限なく続けて、習慣的なものにしてしまい、本物の体験を奪い取ってしまうことです。赤ちゃんがおしゃぶりだけを吸い続けていたら、死んでしまいます。おしゃぶりと母親の乳首とは全く違うのです。

エリヤハウスの害は、彼らの作り出す疑似体験を、本物の体験、聖書が教える聖霊の体験だと主張し続けていることです。私たちの救いは聖霊のお働きとして起こり、神の子とされるという業も聖霊の力によって始められました。聖霊によって始められた働きは、聖霊によって完成されるべきです。わたしたちは、エリヤハウスの間違いを指摘するだけで満足していくはなりません。エリヤハウスの擬似体験の問題は、まさに、私たちがやるべきことをやっていないために、私たちの聖書の理解が浅く、私たちの神学が弱かったために起こったものだからです。私たちはもっと聖書を学び、聖霊の神学を確立し、信徒の心の問題にしっかりと対応できる、ペンテコステの働き人となり、真にペンテコステの働きと言える働きを、継続していきたいと思います。聖霊がお始めになった働きを、聖霊に完成していただけるように努力していくべきだと、深く自戒するものです。

以降は、A先生の文書の流れに沿っておこたえいたします。

I. 「1. エリヤハウスのミニストリーについて」への反論

私は先の文書で、体験主義や実証主義の危険性について縷々説明し、私たちのペンテコステ信仰が、ともすればそのような傾向に流れる危険性を指摘しました。私たちの教団がペンテコステ経験という「体験」に根ざすために、体験を大切にするのは当然ですが、どのような信仰体験でも、そこに健全な聖書の釈義¹の裏付けがなければ、それを自分たちの

¹ 「釈義」という言葉は非常に専門的で、その定義も使用する人によって微妙に異なりますが、私たちの間では、普通、「解釈」とか「理解」とかいう、もう少し柔らかい一般的な言葉が使われます。ただ、この問題の取り扱いでは非常に大切な概念ですので、あえて、専門用語を使いました。ここで私が意味する「釈義」は、聖書が書かれた時の状況、環境、歴史、一般常識あるいは直面している問題などの内で、聖書記者が本当に伝えたかったことを、正しく理解しようとする学問です。そこに用いられている文章の形式は、例えば、教育的な形、論争的な形、詩歌的な形、歴史記述の形、預言的な形などなどいろいろですが、それによって、表現方法が異なり、用語も異なります。同じ用語が使われ同じ表現が用いられていても、

信仰の基本的な教えとして取り入れても、一般化して他の人たちに勧めてもならないことをお話ししたつもりです。そのために、パウロの第三の天に引き挙げられたという、個人的体験を引き合いに出して、説明いたしました。

A先生は文書の最初に、ご自分と牧会をしておられる教会の「体験」を説明して、エリヤハウスが良いものであると、主張しておられるように読み取れます。そのような主張は、自分に良ければ良いという「実利主義」に繋がります。信仰体験は、聖書がそれを良いものだと教えていなければ、教会の教えと実践の中心に据えてはならないと考えます。エリヤハウスの基本的な教えが、聖書の教えによって裏付けされていると、証明することが先決ではないでしょうか。

何年も前のことですが、当時非常にもてはやされていて、現在でもその影響が強く残っている、ピーター・ワグナーという人の書いた、地域靈と悪靈の追い出しを勧める、英文の本を手にしたことがあります。私の悪い癖で、まず裏表紙に書かれていた文章を読んで見ました。そこには、「私が言うことは聖書の教えではありませんが、このようにやつたら伝道がうまく行き、教会が大きくなつた例がたくさんあります。ですから、主のために伝道を効果的に進め、教会を大きくしたいと望みながら、なかなかうまく行かないと憂えておられる方は、ぜひ、これを取り入れてみてください」という意味のことが書かれていました。この時からピーター・ワグナーに対する私の評価は、非常に大変とっても低くなりました。彼は自分の教えていることが、聖書の教えではないと断っているのです。その上で、伝道者に勧めているのです。現在でも、多くの伝道者がこのような人物を高く評価し、その「聖書の教えではない教え」を、教会の信仰と実践の中心部に据えて、活動していることが不思議でなりません。体験主義、実利主義の弊害です。

A先生のお働きが素晴らしいものであり、教会が成長していることは、私も大いに喜んでおります。先生の献身と祈り、学びと努力も素晴らしいものだと聞き及んでおりますし、これまで先生と直接お交わりできたわずかな機会に感じた、先生の円かな人格に深い尊敬を抱くものです。ただ、A先生の最初の主張が、私が前の文章でもっとも力を込めて注意を促した、体験主義の感覚に基づくものであることを、非常に残念に思うものです。

形式によって意味するところは異なる場合もたくさんあります。また、用いられている用語の、用いられた時点での厳密な意味の理解も、欠かすことができません。言葉は時代によって変化するものです。

『釈義』と『解釈』のように、二つの言葉が平行的に置かれた場合の「解釈」は、「釈義」によって理解された聖書記者の意図した意味、教えなどを、現在の自分たちの生活に適用して、あるいは当てはめて、そこにどのような意味があるかを理解することです。私たちの間で、よく行われる「靈的解釈」は、「釈義」を軽くあしらって、適用する部分だけを強調するものです。そこにはそれなりの価値があるとは思いますか、行き過ぎると聖書の勝手な理解となり、間違った方向に向かう危険性が高くなります。釈義も解釈も聖靈の助けを求めるべきものです。

先生はまた、エリヤハウスの創立者であるジョン・サンフォードの教えを、「聖書的に受け止められるものかどうか」と検証しながら聴き、「聖書の御言葉を土台としている」と判断された経緯を語っておられます。果たして、本当に検証すべき検証、すなわち、この教えに関して聖書がなんと語っているかを、健全な聖書教義に立って検証をなさったのでしょうか。さらに、エリヤハウスの基本的な教えや、サンフォードという人物の略歴、特にアグネス・サンフォードとの関わり、聖書に反するインナーヒーリングの教えの影響など、エリヤハウスの歴史をお調べになつたのでしょうか。それができていなければ、少なくともある程度できていなければ、「聖書の御言葉を土台としている」と判断するのは、早すぎるのではないでしょうか。

先生は「学びの中、自分の中にあった、心を堅くしている何かが取り除かれていくことを感じました」と書いておられます。そのような体験は、個人の信仰の成長にとってたしかに大切なものです。でも、それをもってひとつの体系的な教えの正否を論じようとするのは、自分の体験と感覚を判断基準とする、体験主義に陥ることではないでしょうか？もし聖書的な根拠が曖昧で体験主義的感覚が強いとしたならば、それは初心者クリスチヤン、あるいは一般の信徒にはまだ許されることであったとしても、牧会者という指導的立場にある人には、許されることではないと思いますが、いかがでしょうか。

さらに先生は、エリヤハウスの教えを実践することによって、先生の牧会しておられる「教会全体が健康になった」とおっしゃって、実証主義的言葉を幾重にも重ねておられます。私が最も危惧するのは、エリヤハウスという特定の団体あるいは運動の教えではなく、もっと大きなペントコステ運動、カリスマ運動、第三の波運動などを中心に蔓延する、聖書の裏付けの無い体験主義的主張なのです。

II. 「2. この教えの聖書的土台となっている御言葉は以下です」への反論

A先生は、エリヤハウスの働きの土台となっている御言として、申命記5：16、マタイ7：1-2、ガラテヤ7：7-8、ローマ2：1、ヘブル12：15の5箇所を挙げておられます。

まず疑問に思うのは、このような細切れにした聖書の言葉の引用だけで、ひとつの体系的な教えを説明できるかどうかということです。これだけでは、なんの説明にもなりません。せいぜい、エリヤハウスも聖書を用いていますという、論証になる程度です。またこれらの聖句が、エリヤハウスの土台となっているようにも、思えません。

ひとつの運動や教団の働きは、聖書全体からの神学に立つものでなければなりません。

運動や団体の初期の頃は、それが脆弱である場合も認められることでしょう。しかし、エリヤハウスは40年以上も前に創立されたものです。私も、エリヤハウスの創立者の主張に目を通しましたが、これは聖書的な教えだと言っているだけで、ほかには何もありませんでした。つまり証明されていないことの主張だけだということです。ですからA先生が、エリヤハウスの教え、主張、あるいは神学を、少しでも体系的に語ることに、難儀をするのも無理はないと思います。

それにしても不思議なのは、A先生はサンフォードが自分の働きをエリヤハウスと名付けた理由を、説明しておられないことです。エリヤに関わる聖書の語句が重要な意味を持っているのではないでしょうか。

さらにA先生は、エリヤハウスの教えと実践にとって重要な聖書の言葉となる、出エジプト記20：5を挙げておられません。こおれはもっと不思議としか言いようがありません。（後述）

A先生の列挙された聖句と説明に反し、わたしの調べでは（主にジョン・サンフォードのHealingという著書による）、エリヤハウスの神学の土台となる聖書の言葉は、エレミヤ1：10とマタイ3：10です。この二つの聖句には、「根」という言葉に関して、「根が引き抜かれ」（英語ではroot out）とか、「斧が木の根元に置かれている」と言われています。この根が引き抜かれるとか、斧で切られるという考え方を、罪の根を取り除くという考え方につなげているのです。

サンフォードは大変な努力を重ねて、古い性質による罪深い行いと、現在の行動の背後にあるresentment（怒り、敵意、恨み、憤慨）やjudgment（裁き）の罪の違いを説明しています。彼によると・・・私たち部外者にはわかりにくいのですが・・・現在、外に現れてくる罪は、必ず、inner child（内なる子ではなく内なる人の意。成長の過程で傷つき、まだ癒されていない感情や人格のこと）を伴っています。たとえキリストの救いを受けていても、それはあくまでも救われたという立場のこと、立場上の救いのことであって（Positional salvation）、生育途上の体験による傷ついたインナーチャイルド、言葉を変えると、罪の根には及んでいないのです。その罪の根の問題に手を差し伸べるのが、エリヤハウスの働きだということです。彼は、この罪の根に斧を置いて、信徒の罪を切り倒し、引き抜くのがカウンセラーの仕事であると教えていました。

このようなサンフォードの教えは、マタイ3：10の厳密な釈義では成り立たないものです。バプテスマのヨハネが語っている、「斧が根元に置かれている」という表現の意味は、厳粛で完全な裁きが間近に迫っているということで、サンフォードが言うよう

な信徒の活性化のプロセスや、聖化の課程を語っているものではないのです。さらに、サンフォードはこのインナーチャイルドの教えを、少数の特殊なクリスチヤンに適応できるカウンセリングの手法としてではなく、すべての信徒がこの教えによって取り扱われ、この教えによって生きなければならないものであると主張して、間違いを一段と深刻にしています。すべての人に有効なはずの、キリストの血潮による贖いと罪の赦しと罪の力からの解放が、実は、「及ばない部分がある」と言っていることになるからです。聖書の教えからすると、完全な遺脱です。

III. 「カウンセリングとエリヤハウス『祈りのミニストリー』の違い」に対する反論

A先生は、エリヤハウスが「祈りのミニストリー」を主な働きとしていて、「過去のことをいろいろと聞き出していく人為的なカウンセリングによって人を変えるというやり方と一線を引いています」と書いておられます。また、「ですから「祈りのミニストリー」という意味は聖霊さまのカウンセリングとも言えます」とも書いておられます。「聖霊さまのカウンセリング」と言える理由は、文脈から判断すると、「『祈りのミニストリー』によって癒しや解放の御業がおこっています」ということのようです。そして、「批判されている方は（私、佐々木のこと）残念ながら、この点を見ておられないし、無視しておられます」と続けておられます。

すでに述べたことですが、私が危惧しているのは体験主義、あるいは実利主義の傾向です。聖霊さまに聞き、その導きに従っていることを非難しているのではありません。ただ、それが聖霊さまによる癒しや解放だと判断されたのは、何を基準にされたのでしょうか。その聖霊さまの声は聖書の教えと合致しているのでしょうか。聖書には教えられていない形での「聖霊さまの声」を重視し、そこから出てくる体験主義、実利主義で語るのは、控えるべきではないでしょうか。癒しや解放の御業が起こっているから、これは良いものである、聖霊の働きであると断定するのは、危険だと思います。

先の文章でも私は例として上げましたが、ウイリアム・ブランハムという人物は、アメリカのアッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団が正式に否定した、レストラーション運動の提唱者でした。世界中を回って働いた彼は、癒しや解放の業という点では、歴史上もっとも大きな働きをした人物であると、評価されています。多分、エリヤハウスの働きを遙かに上回って、「御業」が顕著だったと思われます。彼も、いつも聖霊による働きであると主張していました。彼のそのような働きを認め、「聖霊による働きである」という主張を聞いて、アメリカのアッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団は、彼と彼のレストラーション運動を否定したのです。その理由を良く考えて下されば幸いです。

私は、A先生がおっしゃるように、「見ないで無視している」のではありません。エリヤハウスの働きに伴う「業」についてはしっかりと見ていましたし、無視もしておりません。ただ、聖書の正しい釈義によっては裏付けの取れない働きであるゆえに、教会の中心的教えや実践には、すべきでないと申し上げているのです。

また、A先生は「人為的なカウンセリングによって人を変えるというやり方と一線を引いています」とおっしゃって、エリヤハウスが、アグネス・サンフォードによって提唱されたインナーヒーリングとは違うと、言おうとしておられるように伺えますが、これもまったく事実に反します。この点については後述します。

次に、A先生が挙げておられる「祈りのミニストリー」の中できれいに書かれている基本的なことにも、エリヤハウスを全く知らない人ならば見過ごしてしまいそうな、いくつかの問題点があります。ただ、細部に及びすぎ、長くなりりますので、ここでは省きます。

またA先生は、「エリヤハウスの教えが極力聖書に基づいた教えを展開している」とおっしゃり、「祈りのミニストリーの中で起こることを聖書の御言葉で確認し、説明しています」と書いておられますが、果たしてそうでしょうか。先生の論理を拝読すると、どうも、そのようには思えないのです。先生は聖書的な裏付けをしないまま、すぐに、「うまくいった」という体験」を判断基準としておられるからです。

先生はすぐ続けて、「(エリヤハウスは) 神学的にはいやしや解放の働きを『聖化』と位置づけていますので、神学を無視しているのではありません」と書いておられますが、これはまことにおかしな理論です。

生物学者が魚は哺乳類であると主張して、「私は魚を脊椎動物と分類していますので、生物学を無視しているのではありません」と言うようなものです。癒しや開放の働きを聖化と主張することには、ホーリネス系の方たちが様々な疑問を提起しておられますが、聖化の問題を論じるのは、私の及ばないことですので控えておきたいと思います。ただはっきりしているのは、癒しや開放の働きを聖化と位置づけたとしても、神学を無視していないと主張する根拠にはならないということです。

IV. 「『4. 私達の中にある間違い』で、批判されている部分に簡単におこたえしようと思います」への反論

A先生は、私がエリヤハウスの祈りのミニストリーを見たり、体験したりしたことがないまま、批判的な意見に耳を貸してわずかの資料を調べただけで、このようであろうとの

想像の中で書いていると思われるとおっしゃっています。たしかに私は、祈りのミニストリーを見たことはありませんし、体験したこと也没有。おっしゃるとおり、一部の資料だけを調べただけですし、批判的な意見を聞いて書いてもいます。ただし、想像で書いているのではありません。賛成の資料も反対の資料も共に、かなり批判的な目で読み、どのような意見や見解にも公平を期して耳を傾けています。鵜呑みにするようなことは・・・私の性格上、あり得ません。

A先生は、エホバの証人をカルトだと思っておられますか？ 信徒や家族の誰かが彼らの活動に加わることをお許しになりますか？ モルモン教はどうですか？ 統一協会はどうでしょう？ 御靈教会や幕屋はどうでしょうか？ 多分先生は、自分の身近にいる人たちが、そのような宗教と関わりを持つことを、お許しにならないと思います。では先生は、それらの宗教を自分の目で確かめて、学ばれたのでしょうか？ あえてそのよう学びはしないまま、学び調べた人たちの意見を聴き、書いたものを読んで、そのような判断をしておられるはずです。それが普通です。その場合、鋭い批判的感覚を持ってやらないと、間違いに陥りやすいのは事実ですが、カルトなどを調べる方法としては、正当な信仰を持っているクリスチヤンや団体のいふことを聞き、彼らの出版物などと比較して調べるのが一般的であって、実際に彼らの集会や活動に参加してみることは、まずないのです。

「一部の資料」という指摘も当然のこととして、お受けいたします。全部の資料を調べるのは不可能なことだからです。ただ私は今回、日本語と英語の資料を合わせると、多分9ポイント程の小さな文字でプリントアウトしても、200ページに及ぶほどの資料に目を通しました。

「かなりの混乱があり、費用も夫婦で14万円であると書かれたり（実際は、1500円位/一人）資料も不明瞭です。事実を確認し客観的にとらえているのではなく、エリヤハウスの働きに感じられている否定的先入観から、持論を展開されているのではないかでしょうか」というご指摘は、少々違います。たしかに私が14万円払ったわけではありませんから、そのような目に遭った人の話を聞き及んだものに過ぎません。ただしネットでちょっと検索するだけでも、このような金銭的問題が論じられています。東京キリスト教神学研究所というところが書いている、ブログの記事にも載っています※2。真面目なクリスチヤンの研究機関が出している文章ですので、単なる言いがかりとは思えません。これはもちろん、日本語での文章ですので、ご自分で確かめてご覧になるのがよろしいかと思います。その上で、反論をしてくださいますようにお願い申し上げます。

※2 この段落の14万に関して、「東京神学研究所の言っていることは確認できないので、削除した方が良い」というアドバイスを、複数の方々から受けています。その通りなのかもしれません。ただし、多くの伝道者たちに送って読んでいたいた文書ですので、ただ削除して「口ぬぐい」の状態に終わらせるのではなく、ここで、そのようなご意見が寄せられたことを書き加えておくべきだと考えて残しました。

先生は、「エリヤハウスの協力教会も、エリヤハウスの事務局も費用の持ち出し状態です。エリヤハウス事務局は、献身的に諸教会をサポートするために、毎年、会計は赤字を出している状態です」と述べておられます。私は算数が苦手で、商売もしたことがありません。でも単純に疑問に思います。費用の持ち出しで毎年赤字を出しているエリヤハウスの事務局は、どこから、「献身的に諸教会をサポート」するお金を得ているのでしょうか？エリヤハウスは世界中の多くの国で展開しています。そこにある多くのエリヤハウスの協力教会は、お金を出しておらずサポートを受けるだけだとすると、どうなるのでしょうか。教会以外のスポンサーがいるのでしょうか。それともサンフォードは誰にも資金を求めず、全てをサポートできるほど大金持ちなのでしょうか。

私は自分の文章が要請を受けての急遽の学びであり、不足も間違いもある可能性を初めから認め、そのように書き、読者の批判や訂正を歓迎しますと申し上げています。ですから、これが間違った情報であるならば、お詫びをいたします。資料を明らかにしなかったのは、学的な文章ではなく、エッセイ的な読みやすい文章にするためで、他意はありません。A先生は、わたしの文章を批判的に感じられ、「どこから、そのような情報を受けておられるのかなと思います」と述べていらっしゃいますが、主に英語のネットであることを認めておきたいと思います。また、個人的にエリヤハウスについて知っておられる方たちにも聞いております。エリヤハウスが出している、DVDも6枚、(各1時間ほど)を見ることもできました。

A先生は、エリヤハウスの働きは「祈りのミニストリー」と呼ばれ、カウンセリングや、インナーヒーリングと一線を引いています」と書き、エリヤハウスとインナーヒーリングの関わりを熱心に否定し、エリヤハウスがインナーヒーリングの背後にある、非聖書的でオカルトの傾向が強い教えを取り入れた事実をお認めになりません。その上で、「どこの資料を見られたのでしょうか。事務局に問合せた所、アメリカで40年ほど前にこの働きがスタートしたとき、混同されて理解されたことがあるが、そのような事実はありません。とのことでした」と書いておられます。

A先生がなさったように、エリヤハウスの間違いについて、エリヤハウスの事務局に問い合わせるのも、調べる課程の一つとしてはあります、その答えを鵜呑みにするのは余りにもナイーブであり、探求者の態度ではないように思います。エリヤハウスがインナーヒーリングを取り入れていることは、明明白白な事実であって、昔、そのように誤解されたことがあるという程度ではありません。現在もそれを行っているのも、隠しようのない事実です。ただ、事務局がそのように答えたのは、エリヤハウスでも方向転換を試みている、あるいは隠しておきたい事実と、認識している可能性もあるように感じます。

エリヤハウスの創始者であるジョン・サンフォードは、インナーヒーリングの提唱者であったアグネス・サンフォードの愛弟子であり、後継者でした。ジョン・サンフォードはその事実を隠さず、しばしばそのことについて語っていますし、著書にもくり返し書いています。彼の代表的著書のひとつは、彼女に献上されてさえいます。エリヤハウスは、今になってその事実を、好ましくないと判断しておられるのでしょうか。

ある意味でインナーヒーリングの先駆的な働きをした、フロイトとユングは仲の良い友人であり、ユングがフロイトの弟子のような感覚でした。ところがユングは、やがてフロイトを鋭く批判し袂を分かちました。そのような決裂は、ジョン・サンフォードとアグネス・サンフォードにはありませんでした。彼らの教えにも基本的な決裂がなく、継続されているのです。A先生がこの事実を熱心に否定なさるのは、なぜでしょうか。A先生ご自身が、エリヤハウスのことをあまりご存知ないのでしょうか。先生のような誠実な方が、知っているのに隠すなどということはありえないと思うからです。だとすると、知らないままにインナーヒーリングの手法を取り入れ、実践しておられるのでしょうか。

あるいはA先生は、エリヤハウスの策略に落ちておられるのでしょうか。エリヤハウスのマニュアルには、たしかにインナーチャイルドへの直接の言及がありません。インナーヒーリングの教えの核となっているインナーチャイルドが、アメリカで強く批判されてきたために、それには直接触れないようにと、「賢く」路線を変えたと考えられています。とはいって、ジョン・サンフォードの「Transformation」という著作には、インナーチャイルドについて幾度もくり返して言及されています。「Transformation」で説明されているインナーヒーリングの教えは、エリヤハウスの屋台骨とも言えるもので、これ無くしては、エリヤハウスは存続できないからです。そしてそのインナーヒーリングは、聖書の教えとはまったく調和しないもので、アグネス・サンフォードに起源を持つのです。

ところでA先生は、私が書いたインナーヒーリングの教えに対する反論の、①から④までを取り上げ、一つ一つにお答えくださっています。それは取りも直さず、A先生が取り入れておられるエリヤハウスが、インナーヒーリングを実践していることを示しているのではないでしょうか。でなければ、インナーヒーリングの教えは、エリヤハウスに関わりがありませんと、おっしゃるだけで済んだことだと思うからです。以下はA先生が取扱ってくださった、インナーヒーリングの問題です。

① A先生は、まず、私が幼児期あるいは胎児期の記憶についての、インナーヒーリングの教えに疑問を呈したことに対し、「胎児は、ことばはないのですが、外の様子、母親の心の動きを感じたりしています。そして、しばしば、罪深い決心をしたりすることがあります」とおっしゃっています。

ます。その心の不適切な決心、裁きを扱うものです」と書いておられます。

胎児がある程度の感覚をもち、意識も持っているということは、たしかにいろいろな人によって語られています。「胎教」という言葉もあるとおりです。モーツアルトの音楽を聞かせると、胎児は落ち着いた情緒を表すことが観察され、ベートーベンの音楽を聴かせると、非常に乱れた情緒が観察されるそうです。ただ胎児の感覚について、どれほど確実に言えるのかは不明です。「外の様子」とはどこの外のことでしょうか。「母親の心の動き」を、どの程度感じているのでしょうか。それを確実に証明できるのでしょうか。それともそれはエリヤハウスの教えの上で必要な主張だから、そのように断定的におっしゃるのでしょうか。

胎児が「しばしば、罪深い決心をすることがある」というのに至っては、なんの証明もできない独断に過ぎません。「心の不適切な決心」とともに、聖書的な根拠を見出すこともできませんし、科学的事実に基づくものでもありません。何によっても証明できない仮説に教えの基本を置くのは、誠実な団体にとって、あってはならないことだと思うのですが、いかがでしょうか。胎児も罪深い決心をするというのは、血筋の中に罪の性質が流れているという、間違った原罪の理解から導き出された、想定ではないかと察します。胎児の血の中にも罪の性質があるから、意識をもった時点で、罪深い決心をすることがあるという理屈だと思います。

またA先生は、私が「他者によって加えられた過去の苦い経験が現在の苦しみの原因となっているという理解は、・・・・・責任転嫁の非難を免れることができない」と書いたことに対し、「なにか他のものと混同されているかと思います」と答えておられます。しかしこれは、混同したものではなく、エリヤハウスの教えを正確に記したものです。もしこの教えをA先生がご存知ないとしたら、A先生がご存知ないだけのことか、日本のエリヤハウスが教えを変えたかの、どちらかであるということになります。

②においてA先生は、私がインナーヒーリングの手法を説明して、「過去の苦しい出来事の記憶に、想像のキリストを登場させて、その苦しい出来事を解決してもらうことによって、現在の問題を解決する」と書いたことに、反論しておられます。A先生は、これは作的な方法ではなく、「祈りの中で、幻の中にイエス様がその方の所にこられて、ケアしてくださることは、しばしばあります」と語られ、「神様の臨在の中で、祈りの空気の中で、イエス様が直接関わって下さることで、作的な手法とは違うと主張しておられます。その上で続けて、「祈りの空気の中、神様の臨在の中で、心の中に幻を見たり、語りかけを受けることは、正しくないと言わると、どうして良いのかわかりません」と訴えておられます。

これに対して私は、三つの問題を感じます。まず、これは作為的ではないという主張についてですが、善意に受け取って、ほとんどありえないことですが、A先生の場合は作為的にはしておられないと考えましょう。しかしエリヤハウスのこの教えはジョン・サンフォード独自のものではなく、アグネス・サンフォードが教えたものであり、多くのアグネス・サンフォードの後継者たちが、教会外、キリスト教界外で行っていることです。ジョン・サンフォードは、それをキリスト教化して、キリスト教界で広めているに過ぎません。それはまさに作為的な方法です。キリスト教界外では、キリストの代わりに、様々な人物を登場させます。カトリック教会ではマリヤを登場させることによって、広く実践されています。エリヤハウスだけは、作為的でないとは言えないのです。

次に、現在のエリヤハウスでは、ロールプレイの手法を頻繁に用いています。ロールプレイでは、想像のキリストを登場させるのではなく、誰かが・・・・多くの場合、エリヤハウスでも経験を積んだ人物が・・・・心を痛めている人の前に、たとえば優しい父親や母親の役割を演じる人となって出て、痛める人の痛みを引き出し、つまり語らせた上で、優しく慰めたり、謝ったり、褒めたりしてあげることによって、癒しと解放を体験させて上げるのです。A先生もこの手法はよくご存知だと思います。これは心理的におおいに効力のある方法で、一般世界の療法としては、否定されるべきことだとは思いません。しかしこれは聖書の裏付けのない心理療法であり、人為的手法であり、疑似体験であり、カウンセリングの一つの手段として用いられることです。クリスチャンが聖霊の名を借りてやるべきことではないと思います。

次に、「祈りの空気の中で、神様の臨在の中で、心の中に幻を見たり、語りかけを受けることは、正しくないと言われると、どうしてよいのかわかりません」という訴えですが、これこそ、私が力を込めて訴え続けている点に関わります。そのような体験が、正真正銘神からの体験であると言えるかどうか、どのようにしたら、客観的に証明できるのでしょうか。あくまでも、個人の体験です。幻を見たり語りかけを受けたりする経験が、ありえないと言っているのではありません。使徒の働きの2章でペテロがヨエルの預言を引用して語っているとおりです。

ただし、エリヤハウスの実践によって体験するそのような事象が、使徒の働き2章で語られていることでしょうか。そのように言うには、聖書の釈義の問題が解決されなければなりません。ここで釈義全体を取り扱って、細かく説明することはできませんが、ペテロが語った言葉の意味を釈義した上で、要約して説明いたしましょう。

「旧約聖書の時代には、聖霊は選ばれた少数の特別な人間にだけ注がれていましたが、（キ

リストが地上の働きを終えて天にお帰りになった) 今や、終わりの日と言われる時代に入りました。その新しい時代には、聖霊はすべての人に注がれます。その結果、ごく一般的な人々まで、預言をしたり、幻を見たり、夢を見たりします。いま皆さんのがご覧になっているのは、まさにそのことなのです」というのが、ペテロの語った言葉の大意です。

また、ここではどうやら「預言をする」ということに重点が置かれているように、読み取れます。幻を見たり、夢を見たりするのは、個人的な感動的な体験で済むことではなく、預言をすることに関連して起こるよう、言われていると思われます。つまり、強調されているのは夢や幻ではなく、預言だということです。この預言も、神の言葉を預かって語るということで、福音を語るという意味に非常に近いものと考えられます。聖霊の時代の人々はみな聖霊に用いられて、福音を語るものになるという意味に近いでしょう。それはまさに、ペンテコステの日に異言を語る人々がやっていたことです。彼らはいろいろな国の言葉で、「神の大きなみわざを語って」いたのです。(使徒2:11) これはまた、無名の人々がキリストの弟子となって福音宣教に携わり、その中のある者たちは、新しい啓示を得て新約聖書を書くに至ったことによって、実現しています。またその聖霊の働きによる預言の活動は、今も、おもに福音宣教という形で継続されています。しかし、A先生がおっしゃるような体験を、ペテロがペンテコステの日に語った体験と同じ性質のものだというの、無理であると思います。

私は、今が終わりの時代に含まれ、多くのクリスチヤンたちが様々な靈的体験をする可能性があることは否定しません。A先生が体験されたようなことも、大いにありえることでしょう。パウロも第三の天に引き上げられるという、神秘的な体験をしました。しかし、彼は神秘主義者にはなりませんでした。つまり、そのような体験を求め続けるとか、これはすべての人に与えられる体験だと主張して、他の人にも勧めるようなことはしていません。

A先生のおっしゃることを聞いていると、すこしばかり、神秘主義者になりかけておられるように感じるのですが、いかがでしょうか。自分の体験を、真摯な信仰体験として大切にするのも、それを繰り返して体験するのも正当化できるでしょう。しかしそれを熱望したり他者に勧めて一般化したりするのは神秘主義です。ペンテコステの日のペテロの言葉は、そのような神秘主義の傾向を正当化させるものではありません。

③においてA先生はまたも、エリヤハウスの祈りのミニストリーがカウンセリングや心理学による療法とは違うと主張しておられます。A先生がそのようにおっしゃるのなら、いまエリヤハウスが日本で行っている祈りのミニストリーでは、以前ほどにはカウンセリングや心理学を利用した療法が、用いられていないかもしれません。祈りのミニストリー

一というのは、エリヤハウスのプログラムの一つに過ぎないのでしょうか。ただ、エリヤハウスはいまでもカウンセリングを重要な手法として用いていますし、インナーヒーリングが行う人為的手法も用いているということは、幾度も説明しましたように否定できない事実です。祈りのミニストリーの指導書のなかに、斧を根元に置くのが「カウンセラーの役割だ」という記述もあるとおりです。

④においてA先生は、「幼い頃の辛い体験は、赤子の時や体内にいるときの体験までも含む。そのような体験の多くは、後になって様々な性的問題となって現れる」という私の記述に対し、「これは、エリヤハウスのどこの教えを言っているのでしょうか？」とおっしゃり、それは「エリヤハウスの祈りのミニストリーにはありません」と、断言しておられます。

しかし、エリヤハウスのテキストの一つだと思われる、「祈りのミニストリースクール」の「基礎課程Ⅰ後期」には、それが微に入り細に及んで取り扱われています。そこでは、先に私が指摘したこと、すなわち、トイレやおむつの躰、性器をいじることからマスターべーション、デートに及ぶまでのことがらが語られています。妊娠中のセックスの胎児に及ぼす影響にも触れ、かなり露骨に語っています。胎児だった者が、両親の乱暴なセックスによって男性性器に似た形のもの、例えば、ナイフを恐れるようになるという、陳腐な教えもここに含まれています。また、セックスを汚れたものであるかのように感じるようになる危険、母親に対する恐れ、生まれた時からの情欲の靈、肉の情欲の習慣、婚前交渉、売春、その他が語られています。

その上で、性的な傷を持っている人のための祈りが、具体的な祈りの言葉で指導され、傷を持っている人が祈るべき祈りの言葉が、指導上のサンプルとして載せられています。マスターべーションをしている人のための祈りも、マスターべーションをしている人が祈るべき言葉の、具体的サンプル指導も載せられています。このような事実を、A先生は否定なさるのでしょうか？ というよりも、私は先の文章で、これらの教えは、エリヤハウスの公式なテキストに書かれていますと、はっきりと示しています。でも、A先生は「エリヤハウスのどこの教えを言っているのでしょうか」と言われ、そのほとんどが性的な問題につながるような教えはエリヤハウスの祈りのミニストリーにはありません」とおっしゃるのです。私はエリヤハウスの教えが、何でも性的な問題に関連付けしまうフロイトの考えをそのまま取り入れているとは言いません。でもフロイトの影響を受けて、胎児期や幼児期の体験を、成人してからの性的問題に結びつけることが多いと、事実を指摘しているのです。教会では性的な問題を避ける傾向があることから、エリヤハウスのやり方は、信徒の必要に手を差し伸べていると、積極的にあるいは好意的に捕らえることも可能です。ただ、その方法は正しいものとは言えません。

また、人間の極めてプライベートな部分に、このような形で入り込むエリヤハウスの祈りのミニストリーは、マインドコントロールに至る非常に危険な可能性を内包しています。人間は自分の尊厳が打ち砕かれてしまうと、抵抗の意識や力を失って、容易に言うがままになってしまいます。性の問題のあからさまな取り扱いは、人間の尊厳性を奪う効果的な手段です。このような指導を受けた者は、指導者の意のままに行動してしまうことになりかねません。たとえ無意識の内ではあっても、実践者たちが、そのような危うい関係を作り上げてしまうことになりかねない働きは、人間の尊さを守ろうとする、私のキリスト教とは相容れないものです。幸い、私は今のところ、私たちの教団に属する同僚者の中に、意識してマインドコントロールを行っている者がいるという情報には接していません。そのことにおおいに安堵していますが、危惧が消えたわけではありません。

A先生は重ねて、「エリヤハウスの働き＝カルト的インナーヒーリングと断定した上で、持論の『成長する強い教会は、権威主義的牧師のいる教会』を展開されているのだと思います」と語り、「エリヤハウスの働きと全く関係がありません」と述べておられます。くり返しますが、エリヤハウスとインナーヒーリングが関係ないというのは、事実に反します。「全く」と言い切るのは、アンパンと餡はまったく関係がないと言うようなものです。私が食べているのは、唐辛子の入っていないキムチですと言うのと同じです。「成長する強い教会は、権威主義の牧師のいる教会」というのも、一般的の傾向として普通に認められることであり、私の持論ではありません。

V. 先祖の罪と断ち切りの祈りに関する反論に対するこたえ

A先生は、「先祖の罪と断ち切りの祈りは、ほかの靈的戦いの教で、されていることを知っています」が、「エリヤハウス祈りのミニストリーでは、「先祖の罪、断ち切りの祈り」という教えはありません」と断言しておられます。私のエリヤハウスの理解が曖昧であったのかもしれません。あるいはエリヤハウスでは「断ち切りの祈り」という言い方はしないのかもしれません。ご指摘を感謝申し上げます。

ただしこれは言葉の問題であって、内容としてはあまり変わりません。少なくともエリヤハウスでは、「先祖の罪」ということを自分たちの教の根幹に関わるものとして、取り扱っています。また、言葉は異なっているとしても、「断ち切りの祈り」と同じことをやっています。

A先生は、反論をお書きになる前に、私の先の文章をよく読んでくださったのでしょうか。これに関しても、私は先の文章で、エリヤハウスのテキスト「祈りのミニストリー」

に載っていると、はつきりと書いております。基礎課程1前期に、長々と記されています。あえて申し上げますと、153～163ページです。そこにはエリヤハウスが、「家系を通しての影響に苦しむ大勢のクリスチャンのためにミニストリーをおこなっている」と、明瞭に書かれています。その上、家系図を書く事まで勧められています。私たちの同僚者の中にも、その勧めにしたがって、信徒たちに家系図を書かせている方がいらっしゃることも、確認しています。それでも、A先生は否定なさるのでしょうか？

A先生は、「罪」と「そむきの罪」と「咎」について語り、特に、普通に用いられている罪ということばと、咎との違いを説明しておられます。「罪」と「咎」の問題については、ウイリアム・ウッドとパスカル・ズィヴィーが、「靈の戦い 虚構と眞実」（いのちのことば社）の第二章でかなり詳しく論じているそうですが、現時点では、私はその本を手に入れることができていませんし（いくつかの書店に問い合わせたのですが、品切れで、出版社にも在庫がないということでした）、罪と咎の違いについて、現在、釈義的に論じるほどの知識を持っていません。そこで、A先生の「咎」についての定義をそのまま受け入れると、なるほどと思えるほど、とても分かり易いのですが、いくつかの「小さからぬ」疑問もあります。

まず、A先生はヘブル語には「罪」という言葉が三つあるとおっしゃり、その三つの言葉を挙げて説明を加えておられますが、旧約聖書が「罪」を意味して用いているヘブル語は、三つだけではなく、もっとたくさんあったと記憶しています。また、先生が「咎」と訳して説明しておられる言葉も、それほど明確な違いがある言葉として、用いられているのでしょうか。新改訳聖書では、確かに先生の説明通りの訳になっていますが、他の訳ではそのようにはなっていません。つまり翻訳者たちは、エリヤハウスが教えているような、明らかな言語上の違いがあるとは、考えていないのではないでしょうか。

ともあれ、私たちはみな、先祖の咎の中に生きているのと同時に、千代に及ぶ豊かな恵みの中に生きているのです。三、四代に及ぶ咎の意識に囚われ、縛られて生きるよりも、千代に及ぶ恵みに感謝しながら、おおらかに生きることを選びたいと思います。私たちの罪も咎も裁きも呪いも、キリストの十字架で取り除かれ、今や、新しく作られた者として、蘇りの命に生かされているのです。ともあれ「罪」と「咎」の論議は、厳密な釈義を待たなければなりませんので、ここまででとどめておきたいと思います。

私が指摘した「身代わりの祈り」、「身代わりの悔い改め」について、A先生は「そのような教えはエリヤハウス祈りのミニストリーにはありません。何かと混同されているのかと思います」と、またしても完全に否定しておられます。

しかしエリヤハウスの英文ワークブック (Elijah House, Workbook, Section1, Page 67) には、「自分の罪も他人の罪も許すことができるし、自分の罪を悔い改めることも他人に代わって悔い改めることもできる」と、明瞭に語られていてその実例も挙げられています。ほかの人に代わって悔い改めの祈りをするというのは、ジョン・サンフォードの師であり友人であった、アグネス・サンフォードがしばしば主張し、実践していたことで、カトリック教会の告悔室の影響が強く反映されています。(Agnes Sanford, The healing Touch of God, New York Ballantine Books, 1983 P.2) エリヤハウスとインナーヒーリングのアグネス・サンフォードの繋がりは、決して切れてはいません。A先生は、これでも否定なさるのでしょうか。

A先生は最後の部分で、「客観的な事実でなく、正しく確かめることなく、想像から持論を展開され、この働きはおいださなくてはならないと、結論されています。先生が書かれ、他教職に配布された文書は、エリヤハウス祈りのミニストリーという聖書の真理にもとづいた健全な働きを教会に導入し、恵みを受けている多くの教会と信徒にとって、とても悲しく、残念に思えるものです」と書いておられます。

私の文書が「客観的事実でなく、正しく確かめることなく、想像からの持論を展開」しただけのものであるかどうか、お読みくださった教職の皆様の判断にお任せします。たとえ私が書いたことの 90 パーセントが不確かな情報による、誤った判断であったとしても、残りの 10 パーセントの正しい情報だけで、エリヤハウスが、A先生がおっしゃるような、「聖書の真理にもとづいた健全な働き」ではないことが明瞭です。

エリヤハウスを取り入れ実践しておられる、同労者の方々を悲しませることになるのは残念ですが、私の願いは、正しく福音を語り、健全な教会を建てることで、いたずらに同労者を非難したり、傷つけたりして、悲しめることではありません。不肖な者ですが、パウロの教えを実行しようとしているだけです。パウロは語っています。「兄弟たちよ。もし誰かがあやまちに陥ったなら、御靈の人であるあなたがたは、柔軟な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。互の重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。」(ガラテヤ6：1～2)

今回の学びを続けるうちに、まだまだたくさん、エリヤハウスの間違いについて知るようになりましたが、後の機会に譲りたいと思います。ただ、先の文章で私が取り上げた問題の多くに、A先生は、エリヤハウスはそのようなことを行っていませんと、事実に反したことと言われるだけで、きちとおこたえになってはいません。とても残念です。どうか、私の疑惑に正面からおこたえくださるように、お願ひ申し上げます。

論点を絞っておきましょう。いろいろたくさんある中で、私が取り上げた重要な点は、①聖書の裏付けがない体験主義について、②ほかの宗教や哲学や心理学を取り入れた、インナーヒーリングを実践している点について、③聖書では否定している、先祖の罪の断ち切りについてです。エリヤハウスの教えに正しい部分があるのは当然ですが、間違いの部分と私が指摘する点が、非常に危険だと思うのです。

ただし私は、エリヤハウスの間違いや危険性を論じることよりも、自分たちアッセンブルーズ・オブ・ゴッドの欠点を認識し、エリヤハウスが取り扱っている問題を、私たちが取り扱えなかったという、重い事実を認めなければならないと、強く感じています。その上で、神の前に悔い改めて、早急に自分たちの態勢を整えることに、全員で取り組むことのほうが、もっと大切だと思います。私たちが信頼する聖霊は、私たちの心の奥深くの問題を最善に取り扱い、解決してくださることができる方だからです。この働きのためなら、多くの同労者と力を合わせて努力していきたいと思います。そのためなら、もちろん、A先生とも力を合わせて行くことができると思います。